

2013 年度若手研究者支援シンポジウム「災厄とトラウマ」
神戸大学文学部 A 棟学生ホール [2014 年 3 月 29 日 (土) 13:00~17:30]

植民地台湾の傷痕——坂口禰子の「時計草」と「蕃地」を読む

小笠原淳 (熊本学園大学)

「植民地台湾の^{トラウマ}傷痕」とは

日本の「理蕃政策」下の「内地人」と「高砂族」の政略結婚によって生み落された「混血」児の「辿る宿命的なもの」(坂口)を「植民地台湾の傷痕」と見做し、坂口禰子が戦前戦後に執筆した二篇の小説に描かれた「混血」に纏わる幾つかの問題を検討する¹。

一、「時計草」(四二・四三)と「蕃地」(五三)のモデルとモチーフ

① 一九三八年の霧社で聞いた日本人警官の父と高砂族の母をもつ混血児下山一の話 (一九三八年四月) → 「時計草」(一九四二~一九四三年)の創作
戦後、蕃地作家とも呼ばれた坂口禰子が初めて執筆した「蕃地」もの「時計草」は、この下山一の話に取材したもの。

坂口禰子と霧社

一九三八年四月、坂口禰子は渡台し台中州北斗郡の北斗小学校に勤務。同年九月、北斗郡内の女教師の研修旅行で初めて霧社を訪れた。坂口はこの時、霧社公学校の教師をしていた下山一と会い(下山は 1932 年から霧社事件公学校に赴任)、同行した「湾生」の松浦女士から日本人警察官の父と先住民の母の間に生まれた混血児下山がその特殊な境遇から度々結婚に失敗しているという話を聞かされた。

松浦さんは、しばらくお姉さんの部屋にいていたが、帰ってくると、窓辺にぼんやり座っていた私に話してくれるのだった。(略)

「もう一人の若い方の話だけだね。下山先生とおっしゃるそうよ。事件の前に霧社を下りていかれた下山さんという警部補の息子さんで、お母さんが、山の娘さん。蕃婦ということ。それで、内地からお嫁

¹ 日本統治期に用いられていた先住民を指す「蕃」の字は現在では蔑称であるが、本報告では当時の状況を再現するために敢えてそのまま用いた。「高砂族」「混血」などの今日では差別とみられる表現も同様である。歴史とテキストに忠実に表記したままで侮蔑の意図はない。

さんをつれてくるのだけど、何度も逃げられるんですって。とてもやさしいよい先生なのに、どうして
もお嫁さんが辛抱しないのね。」

私は、漠然と、下山先生の面影を追いながら、気の毒なひとというものは、複雑なものだ、と考え
たりした。(坂口禰子「蕃地」との関り『霧社』二四八―二四九頁、一九七八年)

○「時計草」は、まだ蕃地を知らない令子の、旅人としての一にかいま見た霧社事件だった。」
(「母の像二部」一九七二年六月、三四頁、強調引用者)

○「嘗って自分が霧社で出会った、下山警部補と日本人の妻との間にできた青年、あの人の後
姿の何とも言えない孤独感とわびしさ、混血児のたどる宿命的なもの、悲劇的なもの、その彼
をモデルにして「蕃地」という小説を書き、それが新潮賞に入賞しました。」坂口禰子「作家の
見た霧社事件と高砂族」『東大中国同学会会報』(一九六四年) 四四頁、強調引用者

○「日月潭から霧社へ登り、桜台旅館に宿泊し、同行の女教師松浦さんを介して旅館のお内儀
に、公学校下山教師の結婚の話を聞き感動する。下山氏は混血であった。」(坂口氏直話)

中島利郎編「坂口禰子 著作年譜(戦前)」五六九頁

② 終戦を挟む十か月間の蕃地中原での疎開体験(一九四五年四月～四六年一月)

→戦後一九五〇～六〇年代に坂口が執筆した「蕃地」小説に実質を与えた

二、下山治平とペッコ・タウレの子「下山一」

一九八五年、台湾は下関条約により清国から日本に割譲され、日本最初の植民地となっ
た。日本は台湾の平地を鎮圧し終えると、山地の統治に乗り出したが、先住民の頑強な抵
抗に遭い難航した。しかし大正年間には山地すべてを制圧し、「帰順」(降服)した「蕃社」
に駐在所を設け、警察官を配置した。更にたびたび抗日蜂起する山地先住民を懐柔する策
として、日本人警察官と部落の頭目の娘との結婚を政策として進めた²。

霧社からさらに北に入ったタイヤル族の集落マレツパ社に赴任した静岡県三島出身の警
察官下山治平とマレツパ頭目の娘ペッコ・タウレは一九一二年に結婚する。この結婚は理
蕃政策による政略結婚第一号となった(二六九頁)。ペッコ・タウレの日本名は下山龍子。

一九一四年、下山一が治平とペッタコウレの長男として誕生。その後治平はペッコ・タ

² 日本当局は原住民が抗日事件をおこすのを防ぐため、各部落の頭目や gaya の頭目に物
資を与えて懐柔した。また、「和蕃」のための政略結婚をおこなって、抗日の意識をおさ
えようとし、さらに政略結婚によって、部落の情報を集めようとした。(『抗日霧社事件の歴
史』一六四頁)

ウレとその息子たちを遺棄して許嫁とともに帰郷、ペッコ・タウレー一家は「蕃地」に日本人として暮らし続けた。この下山一という日本とタイヤルとの「混血児」が、坂口禰子の小説「時計草」と「蕃地」の主人公純のモデルとなった人物である。

一九三六年夏、下山一は父の招きで初めて内地を訪れる。「私は父の責任を全うできていない自分を恥じている。おまえの結婚相手は誰もが認める最も善良で優しく賢い日本人女性から私が選ぶ。それを私のお前に対する償いとして。」(二四四頁) 静岡三島で父が準備した七人の娘と見合いし、そのうちの最後の一人の藤原正枝と修善寺で挙式をあげて霧社へ連れて戻る。しかし正枝は額に入れ墨のある母を蔑み、家庭は諍いが絶えなかった。正枝は結婚七ヶ月後に一時帰郷したまま二度と霧社へは戻らなかった。一九三九年、下山一は霧社縁故者である井上文枝と見合いするために再び内地へ行き、文枝を連れて帰郷。「母はその顔の入れ墨がまた息子の結婚に影響することを深く恐れ、私がない隙に、アワイお婆さんと台北帝大付属医院で手術をして入れ墨を消していた」(下山一自述・下山操子譯寫『流轉家族—泰雅公主媽媽、日本警察爸爸和我的故事』台北：遠流、二〇一一年、二六八頁、訳引用者)。

三、「時計草」「蕃地」における「血液」の叙事

「時計草」は皇民化期の言論統制下にあったにも拘わらず、この小説では霧社事件への言及と理蕃政策への懐疑が仄めかされている点で国策高揚のための戦争文学と異質の価値をもつ。〔当然八紘一字のスローガンを叫ぶことや「陛下の御為に死なうとして精一杯働いている」といった一節を挿入することも忘れてはいないが〕もうひとつ特徴的なのは、〔当時の優生学的背景に基づく〕「混血」「血の純粹」に対する強い執着である。

○父玄太郎

〔理蕃政策に則り〕彼等〔高砂族〕の中に喰い込んで、彼等の手をとってのぼしてやらねばならぬ。〔それには〕彼等の中に私の血を混ぜるしか、道がないではないか。私を源にした子が、孫が、文化人の血を山の人達の中で育ててゆく、其処に自らな(ママ)民俗経営が行われると思った。(坂口禰子「時計草」『鄭一家／曙光』二〇〇一、ゆまに、二二四頁、強調引用者、以下同じ)

然し、私は、お前の最初の破婚と、つづいた不幸に、いよいよ私の誤りを反省させられた。お前と言ひ、葉子と言ひ、どんな幸せがつかめるのだ。

私一人のまいた種子。不運な芽だった。(二二六頁)

しかしここで注目すべきは、民族間の格差を克服する手段として、「血を混ぜる」ことが、玄太郎によって選択されていることであろう。だが、一見突飛なこうした発想は、明治以

降の日本においては、決して突出したものではなかったのである。(星名宏修「血液」の政治学——台湾「皇民化期文学」を読む』『琉球大学法文学部紀要日本東洋文化論集』七号五-五四頁、二〇〇一、二八頁、強調引用者)

○語り手

玄太郎の落した一滴の血が、純から純の子孫へと伝わってゆく宿命の厳しさは、雑婚のもつ哀しい孤独である。純は、何れにも属せない自分の血に、やるせない哀愁の息を吐く。然し、純は、自分が新しい民族のスタートである自負に身震いする。この責の重さは、若い純の魂を極度に高揚する。(二〇八頁)

○純

お父さん！僕は、**民族の血が純潔であらねばならぬ**ということを沁々思います。(二四一頁)
僕は前身したいのです。貴方と結婚する事は後退する事だと思うのです。(二五四頁)

○錦子

私も**血の純粹**って事はいろいろ考えたわ。**民族の血を純粹に保ってゆかねばならない**、と真剣に考へたの。これは、**雑婚からくる血の混乱**だけではないと思うの。(二四九頁)

自分が嫁かうと思った気持ちは、高砂族の縁故とか、そうしたロマンではなく、純粹に、玄太郎や琴子の口を通して聞いた純の人柄に信頼しての結婚である。(二三二頁)

優生学的背景と血統学的思考

星名氏は昭和初期から民衆に普及し始めた優生学や血族結婚の視座から坂口の「破壊」(『台湾新聞』一九四〇年十二月)を含む台湾皇民化期文学を考察している。「破壊」において櫻子が「結婚を避け続け」たのには、非常に明快な理由——**優生学的な知にもとづく決断**——があったのである。(星名、六頁)とする。

が、駐在所の日本人警官と「高砂族」の政略結婚は、人種改良の手段としての「雑婚」ではなく、実際は山地先住民に対する懐柔政策、同化政策として行われたものであったと考えられる。「**蕃通近藤型**」の政策が取り入れられる。

有力者の娘と警察官の政略結婚

- 「生蕃近藤」近藤勝三郎はホーゴ社・パーラン社頭目の娘を妾にした
- 近藤儀三郎はモーナ・ルーダオの妹、テウス・ルーダオを娶った *霧社事件の要因
- 警察官下山治平はマツパレの頭目の娘ペッコ・タウレを娶った 下山一
- 中田安太郎とマヘボ社の勢力者の娘ピラッカ・リユ
- 警察官佐塚愛祐とタイヤル族白狗群の総頭目の次女ヤワイ・タイモ。佐塚佐和子

○サラマオの警察官下松仙次郎はサラマオ社の頭目の娘を妻とした

参考：鄭相揚著、下村作次郎・魚住悦子共訳『抗日霧社事件の歴史』（二〇〇〇）一六四～一六六頁

若い「蕃女」と日本人知識青年の悲恋

坂口禰子「蕃地」（一九五三）

○パーラン社の美女フミと士官候補生の青年牧は関係をもち、牧は自死し、フミは牧の遺児を生む。純は赤子に「霧子」と名付け自身の家族のもとに置く。

真杉静枝「蕃女リオン」『南方紀行』（昭和書房、一九四一）

○「蕃女リオン」と内地からきた自殺願望のある大学出の青年梶原の純愛を描く。梶原は「蕃地」への出入りを禁止され、思い詰めてリオンに心中を持ち掛ける。梶原は死に、リオンは間もなく梶原の子を生む。駐在所の夫婦はこの「混血児」に「愛子」と名をつける。

内地留学を経た台湾人エリートと日本人女性との内台結婚

○庄司総一『陳夫人』（1940）＊一九四三年大東亜文学賞：時代背景大正初期から昭和一〇年頃までの二十年間。台湾の資産家陳一家の長男、陳清文に嫁いだ日本人の妻安子の多難な半生を描いた長編（尾崎秀樹「決戦下の台湾文学」『近代文学の傷痕』一四〇頁）

本島人墓地の移転整理の問題をめぐって、陳清文。（三四〇頁）

「君の内台婚姻は君から魂を抜き去り信念を擦り潰したのさ。それ以外に何があるものか」と相手は極言した。344

陳清文「われわれの内台結婚といふ形態から生じる一種の悲劇——これを何とか解決したいと思っているだけなんだ」

妻「悲劇ですって！悲劇、悲劇——」³

○坂口禰子「鄭一家」『台湾時報』（一九四一）：内地の大学を卒業した鄭樹紅と小夜との内台結婚。母玉の反対。「玉にしてみれば、言葉のわからない嫁をもらって、内地人の優越感で、家の中をかきまわされてはたまらないと言う気持である。」（20頁）

まとめ

日本統治期の台湾に取材した小説において、日台結婚や「混血融合」の問題は頻繁に描かれ、その中心的なテーマの一つであった（日本近代文学においては、石川淳「白描」、金史良「光の中に」等に混血表象がある。山口俊雄の論「戦中小説における混血表象」参照）。が坂口禰子の二篇の小説が異なる

³ 『陳夫人』は日台結婚を正面化から描写する一方、異文化融合（混血融合）の可能性を示唆し同化政策の障壁を打ち壊そうとする効果があった。（王曉芸「庄司総一の『陳夫人』に見るハイブリッド文化の葛藤」四〇頁）

のは、唯一この二篇だけが、「理蕃政策」下の政略結婚で生まれた「混血」児の「迎る宿命的なもの」、日本の植民統治が台湾に強いた傷痕を、繰り返し、執拗に抉り出そうとしているところにあるだろう。そして坂口自身は、戦後の「蕃地」の執筆によって、「侵略者」であった自身が書いた「時計草」を贖罪の意識から補完しようとしていることが分かる。

「時計草」(『鄭一家』一九四三年九月) 梗概

「蕃地」M(霧社)の公学校に勤務する師範学校卒のエリートの山川純は、「蕃地」駐在所の日本人警察官山川玄太郎と「高砂族」の母の間に〔理蕃政策上の政略結婚によって〕生まれた混血児である。玄太郎は霧社事件の発生前に母や純を捨て帰郷し、「内地」で新たな家庭を築いている。父玄太郎の言いつけに従って純は「内地」の花嫁をMに連れ帰るが、「内地」の女たちは母が「高砂族」であるのを知るとたちまち逃げ帰ってしまう。今ふたたび結婚相手を探しに「内地」を訪れた純は、父の意志とは反対に民族の血を純潔に保つことが「前進」だという考えに傾斜していくが、純のもとに嫁ぐことを決心した良家の娘真子は「高砂族の文化を、日本の伝統に少しでも近寄せ高めるのも前進ではないか」と純に訴えかける。かくして純は我を取り戻し、錦子と「俱に行かむ!帝の命のままに!」と〔自分が民族の新たなスタートとして〕心新たに歩みだす決心をするのだった。

「蕃地」(『新潮』一九五三年十月号)

タウツア駐在所の警部補だった林田壮吉は、「理蕃政策の功利的な手段のために」、タイヤル族タウツア社の頭目の娘サツキを娶り、二人の「混血児」純と妹をもうける。純は「理蕃政策」によって計画された作弄的な自身の生を耐えがたい屈辱だと感じている。しかし彼はこのあらかじめ用意されたレールの上を否応なしに走っていかなければならないと思っている。純は「優位なものへの憧憬」を持ち、父の意志にしたがって、「内地」の女と結婚しようとするが、母が「蕃婦」であることを打ち明けた途端、「内地」から来た女たちは彼のそばを離れていった。三度目の縁談で内地から真子を連れ帰った純は、母が蕃婦であることを告げることができない。しかし真子は、義母が「高砂族」であることを夫から告白された後も、そのことをありのままに受入れ、献身的な日本人妻として純を励ます。終戦後、純は真子の導きによってそれまで希薄だった母サツキの血を自身の中に見出していく。

パーラン社の美女フミと台湾軍の士官候補生の青年牧との悲恋がサブ・プロットとして挿入される。二人は霧社事件殉難碑の前で関係をもち、フミは牧の子を孕むが、日本の敗戦に絶望した牧は自死する。フミが生んだ牧の遺児は、純によって霧子と名付けられる。